

「イメージ表象の論理」

塩野直之（東京大学）

『人間本性論』でヒュームが「思考の原理」と呼ぶものは、現代の分析哲学のそれとは著しく異なっている。一つの思考と他の思考とが有すべき関係として分析哲学の訴える原理は、合理性や正当化である。それに対してヒュームの訴える原理は、類似性、近接性、そして因果性である。私はこのうち特に「類似性」に着目し、それが思考に占める重要性を復権させることを試みる。そしてその帰結は、類似性の判断をも包摂するような、よりゆるやかな「合理性」の概念の提唱に至る。

類似性についてヒュームは、それは直観によって見出される恒常的な関係である、と述べている。私の議論は、この主張を擁護した上で、それに依拠してなされる。恒常的な関係とは、問われている当の事柄にのみ依存し、他の偶然的な事情に左右されない関係のことである。そして直観によって見出されるとは、推論過程を経ることなしに当の事柄から一挙に見て取られる、ということである。

類似性が直観によって見て取られるという考えに反対する者として、マクドウェルが挙げられる。彼は思考の原理を合理性や正当化に求める哲学者の典型である。なぜならば彼は、知覚の内容を概念的なものと考えることによって、知覚に基く判断までも正当化された判断とみなすからである。すると彼は知覚に基く類似性の判断についても、同様の主張を行うことができるであろうか。私は彼の見解の詳細な批判的検討を行い、類似性の判断に関してはそれを「合理的」なものともみなすことはできず、むしろ「直観的」なものとも考える他に術はない、と論じる。

私はさらに、類似性の判断は知覚だけではなく想起によっても下すことができることから、「想起的概念」というものを導入する。想起的概念は通常概念と違って、他の諸概念とどのような論理的関係に立つかによって個別化されるのではない。それは、当の対象をイメージし、まざまざと想起する能力を持つことによって成り立つのである。

人間の思考を「合理性」を中核に据えて捉えることには同意するとしても、合理性を狭い意味に解してはその試みは成功しない。私は最後に、「直観的」な判断や「想起的概念」をも取り込むような、よりゆるやかな合理性を提案する。言い換えれば、私はマクドウェル的な狭義の「合理性」からヒューム的な「人間本性」への転換を促すのである。